

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 19 日現在

機関番号：15401

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2008 ～ 2012

課題番号：20320103

研究課題名（和文） 世界遺産・巖島の総合的研究—「伝承・伝説の時代性」の視点から—

研究課題名（英文） Integrated research on the world heritage site Itsukushima  
- from the point of view of tradition, transmission and  
their change over times-

研究代表者

狩野 充徳（KANO MITSUNORI）

広島大学・大学院文学研究科・名誉教授

研究者番号：30132426

研究成果の概要（和文）：多くの伝承・伝説に包まれた世界遺産・巖島は、人間社会の傍らで、人びとの暮らしとともにあった。無文字時代には、原始的宗教の雰囲気漂わせながら、サヌカイト・安山岩交易の舞台として。有史以後には、佐伯景弘らの創造した伝説を原点に、中世では信仰と瀬戸内海交通・交易の拠点として、近世では信仰と遊興の町として、近代では軍事施設をもつ信仰と観光の町としてあった。そして、それぞれの時代に、多くの伝承・伝説が再生産されていったのである。

研究成果の概要（英文）： The world heritage site Itsukushima is warped in many traditions and has always been closely connected to peoples daily life. While it spread an atmosphere of primitive religion in preliterate times, it was also a place for trade of sanukite and andesite. In historical times, the legend created by *SAEKI KAGEHIRO* and others became widely known and Itsukushima became a basis for faith and trade in the Seto Inland Sea in the middle ages. In early modern times a town of faith as well as pleasure, in modern times a town of tourism and faith that also housed some military facilities. And in all periods, many legends and traditions were reproduced.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	4,300,000	1,290,000	5,590,000
2009年度	3,500,000	1,050,000	4,550,000
2010年度	3,100,000	930,000	4,030,000
2011年度	2,200,000	660,000	2,860,000
2012年度	2,000,000	600,000	2,600,000
総計	15,100,000	4,530,000	19,630,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・日本史

キーワード：巖島神社・伝承・巖島文書・巖島縁起・海上祭祀・世界遺産・神祇信仰

### 1. 研究開始当初の背景

広島県廿日市市に鎮座する巖島神社は、平成8年（1996）世界文化遺産に登録されたが、その歴史や文化については学問的吟味をへない、伝承・俗説が平然と語られる状況であった。この傾向は、その後もマスコミ等によって増幅されていったが、こうした事態を憂い、巖島神社と島での営み（以下、この

総体を巖島と略称する）を人間の営みが造りあげた文化遺産として、歴史的・文化的な価値を学術的に明らかにして次の世代に引きつぐために、2004年、広島大学に「世界遺産・巖島一内海の歴史と文化プロジェクト研究センター」（以下、広大巖島センターと略す）を設立した。

この研究センターは、人文学の立場から学問的に巖島神社と巖島を位置づけなおし、世

界遺産としての価値を高めようとするものであり、いわば世界遺産・厳島を神話の世界から人間の世界に取り戻そうとするものである。このような観点から、「世界遺産・厳島の総合的研究—伝承性の再検討」という研究課題で、2005年度から3カ年の科学研究費補助金を交付され、その成果のうえにたち、それぞれの伝承をふまえて、その時代性・歴史的意味を検証するために、「世界遺産・厳島の総合的研究—『伝承・伝説の時代性』の視点から—」という課題で、科学研究費の補助を申請したものである。

## 2. 研究の目的

交付をうけた研究課題は、広大厳島センターの趣旨にそった研究を目的としていたが、とりわけ、太古から神のみが住む島という神話や、平清盛によって創建された社殿は不変のものである、島は神の住む聖地として崇拜され、近代文明化のなかでも「清浄」の地であったという通説の否定を目的とした。

研究計画調書では、①島南側の発掘調査ないし発見された考古遺物の分析を進めて、平安期までの時系列による考古学的な分析を行うとともに、海上交通の視点や神仏習合の観点から厳島を位置づける。②平安時代における厳島神社信仰を、平氏の氏神という視点ではなく、佐伯氏など厳島周辺勢力の動向を整理し、清盛時代までの基盤形成の跡を明らかにする。③近世和書の整理・翻刻を進めるとともに、厳島御文庫への寄贈者についての調査・データ整理を行う。④建築物のデータを整理して、その全体像から文化財学的な考察を行うとともに、大願寺文書の調査を進めて神社建築の面から信仰内容の変遷を考える手がかりを得る。さらにおなじく大願寺文書の分析から、近世における厳島神社の神仏分離への動きを考察する。⑤大正・昭和期「芸備日々新聞」の厳島関連記事について収集を進め、文明化と接触したのちの姿を分析していくことを、課題に設定した。

また申請時に、それまで非公開の厳島神社棚守野坂家（現宮司家）の文書調査（宮島町史編纂時に撮影されていた近世期写真史料の閲覧）が許可されたため、この神社関係文書群（以下、宮司家文書と略す）の解説・分析などを⑥点目の課題に掲げていた。

もちろん、上記6点以外にも、参加している研究分担者の問題関心にしたがって、厳島をさまざまな切り口から学問的に分析することが前提であったことはいうまでもない。

## 3. 研究の方法

本研究課題は、人文学の諸学問から、厳島を検討するというものであるから、その方法論は、直接厳島にかかわる史料・資料の収集やその解説・分析のならず、厳島にかかわる

諸事象をとりあげ、これを他の神社や人間集団のそれぞれと対比することによって、厳島の特異性をうかびあがらせる研究方法もおおいに意義あるものといえよう。したがって一見、関連が薄いようにみえる事象の分析にあたっては、研究メンバーには、「伝承・伝説の時代性」を考えるとという問題意識をもちながら、それぞれの学問的営為を実践することがもとめられる。

以上の立脚点にたち、先述6点の課題とその他の課題を追究するために、研究計画調書の研究計画・目的に記したように、研究代表者・分担者を④「古代・中世の遺跡・遺物と伝承検討」担当、⑤「近世～現代の建築・観光と伝承検討」担当、⑥「近世文芸・口承文学と伝承検討」担当の3グループに編成し、①②の課題を④グループ、③とその他の課題を⑥グループ、④⑤の課題を⑤グループ、⑥の課題を全体で担う体制で、研究を推進した。

④グループ担当部分については、発掘調査候補地の精査をすすめるとともに、厳島の遺跡を、一定の時系列のもとで、他の島嶼部における祭祀遺跡や一般遺跡と比較する作業を進捗させる一方、平安・鎌倉・室町時代の文献史料を博捜するとともに、『広島県史古代中世資料編Ⅱ・Ⅲ（厳島文書編）・Ⅳ（県内文書編）』など関係史料を載録する史料集のデータベースを整備して研究環境を整えた。また、課題⑥についても、許可された範囲内の史料について、確認と筆記複写をすませた。

しかしその一方で、申請時に調査候補地としていた一帯の精査の結果、発掘調査による成果があまり期待できないことが判明した。しかも厳島全体が、文化財や景観等の保存・保護にかかわる様々な法の規制下にあり、他の有力候補地の調査にはクリアすべき課題が多すぎると判断し、山岳部域での遺跡分布の踏査、瀬戸内海や他海域島嶼部での祭祀遺跡・一般遺跡との比較を重視する方向へ転換せざるをえなくなった。後者に関しては、広島県（厳島・走島・宇治島・袴島・仙酔島・斎島・尾久比島）、岡山県（大飛島・小飛島・高島・六島）、香川県（広島・本島・伊吹島）、愛媛県（魚島・高井神島）等における島嶼部祭祀遺跡の確認、表面採集を継続的に実施し、その成果を『広島大学考古学研究室紀要』等の専門誌に掲載した。また、舞鶴市における古墳時代祭祀遺跡である千歳下遺跡出土遺物の整理作業とその関連資料の見学・情報収集を継続し、成果を前記『考古学研究室紀要』に掲載した。

また、⑥グループ担当の課題③についても寄贈者の大枠しか把握しえなかった。これは対象となる御文庫所蔵典籍が、われわれの悉皆調査後に宝物館へ移管されて、出納に制約が生じ、大がかりな調査が実施できなくなったためである。このため周辺の図書館や資料

館に所蔵される厳島関係の古典籍の調査に重点を移さざるをえなかった。

①グループ担当の課題④については、大願寺文書の調査を継続する一方、日吉大社など厳島神社と同等の社格・歴史を有する有力神社の現地調査を実施、社殿建築・社頭景観等の分析を行って、本殿形式の分類や有力神社の本殿の内部構造に関する、新たな知見をえるとともに、厳島神社の特殊な本殿形式の起源と、それに対する従来の俗説の評価を検討した。また神仏分離への動きについては、前後の史料、とりわけ近代の廃仏毀釈との関連性をもとめ、宮司家文書に調査の枠を拡げた。

課題⑤についても、着実に進行させ、大正14年(1925)の厳島関連記事まで復刻作業を行った。

研究計画調査にかかげた課題以外にも、弥山への登山者にアンケート調査を実施し、エコツーリズムについての考え方を調べたり、厳島への観光者を対象に日本語、中国語、韓国語、英語でアンケートを行い、厳島について期待する情報や、来島の契機・期待などについて調査した。また、大願寺所蔵の仏像・工芸品等について調査を行い、とくに梵鐘については和鐘、韓国鐘など他の類例を照合しながら、梵鐘の意匠等を詳細に検討した。

近代文学に関しては、厳島における軍事施設の存在から、文芸思潮上で厳島の近代を考える視点を確立して、地方新聞の連載小説などに資料博搜の範囲を広げるとともに、厳島を舞台とした現代文学作品の大まかなリストを作成し、これにそって国会図書館や吉川英治記念館などで調査を行った。

以上のように、3グループにわかれて、それぞれの課題を追究してきたが、各年度の中間と年度末には、関連遺跡や施設などについて合同の調査や、課題を集約して伝承・伝説の時代性について議論する場としての合同研究会を設定して、課題の共有化を試みた。またそのあいまには、研究の成果を確認しつつ、研究の内容を一般市民に公開するとともに、市民や厳島関係の諸活動にとりくむ方がたから、研究の方向についてのサジェスションをいただくことを目的に季例会などを開催、課題・関心の持続をはかった。

#### 4. 研究成果

ここでは、学問分野毎に研究成果をとりまとめたうえで、その成果にもとづいて厳島にかかわる「伝承・伝説の時代性」についてとりまとめることとしたい。

考古学分野では、3つのテーマについて、一定の成果をあげることができた。厳島本体の考古学的検討では、弥山にいたる中腹地(標高350m)で磐座遺跡を新たに発見し、遺跡表面を精査したところ、6世紀末葉の須恵器、鉄鏃などを検出した。厳島神社の創建

が推古元年(593)とされるだけに、興味深い事実を確認できた。古墳時代以来、厳島において祭祀活動が行われてきたことが考古資料から明らかになってきたといえる。

古墳時代から奈良時代にいたる、海浜・島嶼の祭祀遺跡の性格を把握するための調査・研究では、前述の舞鶴市千歳下遺跡等のあり方から、古墳時代の日本海沿岸の祭祀遺跡が瀬戸内地域の祭祀遺跡よりも早くに出現し、5世紀にいたって瀬戸内地域の祭祀遺跡にとって代わる状況から、大和佐紀政権から河内百舌鳥・古市政権へとその対外的交渉における航海活動(航海コース)の変化を読み取った。平成24年度には、この一連の研究成果を、広島大学公開講座「歴史のなかの瀬戸の海」において、「瀬戸内海における古墳時代の祭祀遺跡をさぐる」において発表し、社会教育活動にも貢献することができた。

第3点は、厳島で検出された縄文時代から弥生時代にいたる石器の石材産出地の特定についてである。この点については、本科研に先行して採択された平成17～19年度科研からの課題であった。島の北西部にある大川浦遺跡の縄文時代石器類の調査研究の結果、香川産サヌカイト利用と推定される石器類が認められ、当時すでに瀬戸内の内海交通も発達し、物資の活発な流通が存在していたことを示すものとして注目された。厳島は、瀬戸内西部の広島湾岸に位置するが、東西に長い瀬戸内の先史時代に遡る内海交通、物資流通の形成を検討するにあたっては、サヌカイト・安山岩産出地は瀬戸内地域に点在しており、そうした産出地の石材利用も問題となる。たとえば山口県にもサヌカイト・安山岩産出地は存在し、瀬戸内西部については、そうした石材の利用の検討も必要であったからである。

そのため、今回の科研では、厳島および瀬戸内の島嶼部の考古学的踏査とともに、瀬戸内のサヌカイト・安山岩産出地について、これまであまり考古学的内容が明らかでなかった産地を中心に踏査を実施した。この踏査については、『内海文化研究紀要』に調査研究成果を発表したが、瀬戸内のサヌカイト・安山岩産出地の様相についての資料がえられ、厳島をはじめ瀬戸内の内海交通、物資流通の形成過程の検討に貢献できる成果となった。

日本史学分野の古代史関係では、六国史や古記録、厳島関係文書などをもとに、厳島神社が一宮として確立するまでの過程と、その後の平氏政権との結合のありかた、そこにおける厳島佐伯一族の動向などについて検討した。とりわけ、考古学分野の成果として6世紀代に遡及できる祭祀遺構が島内に確認できたことによって、佐伯鞍職の創建という問題が現実味をおびてきたととらえること

も可能であるが、その祭祀遺跡の立地や奈良・平安時代の遺物散在状況などを考えると、これは原始的な山岳信仰の流れで検討する必要があり、佐伯鞍職云々は、後世とりわけ佐伯景弘時代の述作的要素が高いのではないかという視点から検討した。

厳島の史料上の初見である弘仁2年(811)年の速谷神との併記の意味から出発し、貞観期における宗像神との融合、さらに大神宝授受の過程をへながら、一宮的社格が確立すること、その過程で安芸中北部に勢力を有する凡氏系安芸国造に対抗して、佐伯国造を主張しはじめたこと、国衙官人としての地位を確立する一方その政治力をもとに厳島神社領荘園の獲得・展開にのりだしていったこと、平氏時代には、清盛一族と密接な関係を取りむすぶだけでなく、景弘子弟は朝廷の中下級官人としての地位を確保して、国家的機構のなかで二十二社に匹敵する厳島神社の格を確立していたことなどを検証し、平氏滅亡後も、佐伯氏が安芸国のなかで影響力を維持し、厳島社領荘園等が没官領とされないような体制の構築に努めていたことなどの見通しをえた。この視点から史料の再吟味をかさね、学術論文として成文化を図っている。

中世史関係では、山口県文書館など歴史資料保存機関において厳島関係史料を検索し、閲覧・写真撮影を行った。その結果、山口県文書館に寄託された古文書(「山野井家文書」「五国証文」など)のなかに、厳島関係史料が原文書もしくは写しの形でのごさされていることが判明した。また、かつて『宮島町史』編纂のため撮影された宮司家文書のなかに『広島県史 古代中世資料編Ⅱ・Ⅲ』(厳島文書編)などには未収録の中世資料が混入していることが判明したため、これらについても複写・翻刻の作業を行った。このような厳島関係中世史料の掘りおこしをもとに、戦国・豊臣期における厳島社の社内機構の史的変遷と島内外所領の権利関係、厳島を取りまく経済環境、さらには銀の地域浸透の実態について確認することができた。これらの研究成果は、すでに一部は既発表の論考で利用したが、今後より精緻に検討・考証をすすめ、学術論文として順次公表していく予定である。

近世江戸時代の厳島棚守・野坂家文書や、宮司家文書の筆写・翻刻につとめるとともに、大願寺文書などの整理をもとに、幕藩体制下への編入にさいして、厳島神社の中世領主的権益が削減されていく過程を検証するとともに、近世厳島神社(大聖院・大願寺を含む)の財政収支構造について分析し、藩から給付される社米のみならず、広島藩士や諸国大名などとの師檀関係にもとづく御師役としての収入や、師檀関係にない大名等からの祈祷・宿舍提供その他にかかわる拝領銀などにも依存せざるをえない窮屈な状態にあった

ことを明らかにし、座主・棚守などの上層部は兎も角として、近世後期には社家中・諸寺院などの財政はかなり逼迫していった実態を明らかにした。

また山口県文書館等の史料調査によって、江戸時代の他国商人や僧侶などが、厳島社に参詣しての感想や、厳島のなかで歌舞伎見物や茶屋などでの遊興にすごす様子を記した新史料の翻刻・紹介などにつとめた。

近代の厳島については、明治～大正期の『芸備日日新聞』の記事を復刻する作業をおして、次のような知見をえることができた。①幕末までにすでに実質上観光地化していた厳島は、明治期になると、多数の外国人客の来島により国際化しはじめた。②厳島の国際化にともなって、それまで「清浄の島」伝説で彩られていた同島が、文明の視線にさらされることとなり、コレラ・チフスの流入によって「不潔」という言説が語られることとなる。③国際化・観光化は大正期に洋風ホテルやロープウェイ建設をもたらし、とくにロープウェイ建設は「神の島」の自然保護との抵触が議論されるようになるとともに、伝承・伝説の再構築がめざされた可能性も大きいといえよう。

日本文学関係では、日本古典文学研究の立場から、厳島内外に伝存する和漢の古典籍について書誌学的研究を行った。前述の宮司家文書の調査は、神社伝存の和歌・連歌等の文芸資料の実態が把握でき、今後の研究に大きな指針をえた。また、野坂家伝来の古典籍資料について、宮島歴史民俗資料館への移管時に作成された書目リストによって、その大綱を確認することができた。さらに、江戸時代以後の連歌関係資料の所在を確認できたことも、当該期の信仰や文化活動を確認するうえで有益な一歩であった。

個別の研究では、中世に作られた『厳島縁起』の諸本調査を行った。そのなかで、これまで未紹介だった広島大学図書館蔵『厳島の由来』、徳江元正氏蔵『厳嶋之御本地』、岩国市中央図書館蔵『厳嶋大明神御縁記』、妹尾架蔵『厳嶋大明神縁記』の4本を全文翻刻できたことは、今後の本文・伝来系統の解明に資するところ大と考える。

また近世文学関係では、広島藩主浅野綱長・吉長の2代に仕えた藩儒寺田臨川が、自分の主要業績を数度にわたって厳島神社に奉納したことから、臨川の事蹟を明らかにすることで近世中期の文化拠点としての厳島を再考する契機となると考え、現時点で追跡可能な伝記的事実を年譜の形でまとめるとともに、広島藩の学芸全体から見た臨川の位置づけを試みた。特に、府中町在住の子孫宅に伝存する基本資料の調査を許されたことは、今後の研究の基盤整備という点で非常に有意義であった。他に、『懐珍厳島記』や滑

稽本『宮島土産』の諸本調査、広島や厳島を活動の拠点とした国学者近藤芳樹関連の資料調査も一定の成果があった。

さらに日本近現代文学研究の立場から、厳島を舞台や素材にした近現代文学の作品を調査し、近現代史の中で厳島が影響を与えた文芸について検討を行った。具体的には、厳島を扱った大河ドラマの原作本とノベライズ本（吉川英治「新平家物語」、藤本有紀「平清盛」）における厳島や瀬戸内海の表象についての整理と分析を進めた。また今日世界遺産として表象される厳島が、日露戦争前後には軍都広島を防衛する要塞の役割を果たしていたことを検証した。

なお社会言語学研究の立場から、宮島の言語景観について研究し、案内表示等に使われている言語（日本語、英語、中国語、韓国語）の使用状況を分析した。また、民俗学者宮本常一の事跡研究にも従事してシンポジウムを開催、宮本常一の写真のなかから特に広島県に関連するものを取りあげて展示した。シンポジウムでは、厳島を中心とした観光のあり方について議論した。

文化財学分野では①厳島神社の海上社殿の起源についての定説（なかば伝承と化している）を再検討した。従来の定説では、厳島自体を神体山とし、神体の上を避けるため、かつ神体山を拝むために本殿に先んじて海上に拝殿が創建され、その拝殿のちに本殿に変化したとされていた。また、13世紀末までは厳島は無人島であり、14世紀になってから社人や社僧が島内に来住したとされていた。それに対して、厳島神社の古文書・伝承・地形や本殿形式と拝殿の起源を検討し、また他社における神体山伝承（御上神社・御神神社・浅間神社など）の再検証、本殿への神の降臨の伝承（貫前神社・籠神社）の検討を行い、それらを総合して、そうした定説は根拠のないものとして完全に否定されるべきものと結論づけた。

すなわち厳島神社の本殿は、創建当初から現在地にあったが、そこは元来陸地であり、仁安元年（1166）までに平清盛が人造の海となして海上社殿を創建したとする。その成果はとりあえず、一般教養書として出版公開した。また②厳島神社所蔵の国宝密教法具に関する調査を行い、制作年代について、平安時代に遡るものという従来の定説に対して、様式等から鎌倉時代前半期のものと結論づけた。

以上、それぞれの分野からさまざまな視点で厳島の実像にアプローチした成果を述べてきたが、総体として我々が確認できたことは、多くの伝承・伝説に包まれた世界遺産・厳島は、人間社会の傍らで、人びとの暮らしとともにあったということである。伝承・伝説を創造する主体が人間であるから、それは

当然のことであるが、荘厳・静肅を旨とし俗世を否定する宗教的聖地というよりは、俗世のなりわいを前提にして、その周辺に神を模索するという視点のほうが、厳島の実像にせまりうるのではないかと考えるのである。

古墳時代以前の文字のない時代には、アニミズム的要素にみちた宗教者の跳梁を山岳部にみながらも、漁猟・採集・農業等の生業に励んだ人びとの、サヌカイト・安山岩交易のひとつの舞台として厳島は認識されていたのではなからうか。

文字史料に厳島が登場して以後は、安芸国南部から北部、さらには瀬戸内海一帯の人びとの信仰をうけながら、社殿が整備されていき、平家と結合した佐伯景弘らの尽力によって現在の厳島神社の原像が確立したのである。その社殿・社格の整備の過程で、景弘ら中世初期の人びとらによって伝承・伝説が産みだされ、その後も室町期の厳島縁起のように増幅されていったと考える。その変化のなかで、厳島は周防灘と豊後灘を經由し畿内に結節する瀬戸内海交通・交易の拠点として、中世の人びとに意識されていたといえよう。

また地域分権の時代をへて形成された近世・江戸時代には、瀬戸内海交通の要衝であるとともに広島藩の遊興・観光の町としての側面がつよまり、近代では先述の地勢的要因から軍事施設が整備される一方、神社参拝ともなう観光の町にふさわしい摸索がなされていったのである。その摸索や工夫は、現在でもさまざまな形で実践されているが、その原点には旅行者のニーズや趣向を理解する必要がある。この点でも観光地理学の視点から、多くの提言をすることができた。

## 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計77件）

- ① 竹広文明、瀬戸内のサヌカイト・安山岩産出地について、内海文化研究紀要、査読無、41、2013、1-14
- ② 瀬崎圭二、厳島が「撮影禁止」だったころ、厳島研究、査読無、8巻、2012、14-29
- ③ 勝部真人、劉軍、『芸備日々新聞』厳島関連記事7、内海文化研究紀要、査読無、2012、1-23
- ④ 本多博之、中近世移行期西国の物流、日本史研究、査読有、585、2011、83-112
- ⑤ 妹尾好信、徳江元正氏蔵『厳嶋之御本地』翻刻と解題、厳島研究、査読無、7、2011、19-33

〔学会発表〕（計30件）

- ① 伊藤奈保子、厳島神社所蔵国宝密教法具

について一五銛種子鈴を中心に一、第2  
2回佛教文化学会、2012年12月1  
日、大正大学（東京）

- ② MIURA MASAYUKI, *Lo spirit del mare : il temple shintoista di Itsukushima nel contest storico e geografico del Mare interno di Seto*, 3 Jun 2012, Convegno INTERNAZIO di STUDI (Citta e Culture dell)Acqua(招待講演), Museo della di Amalfi Italy
- ③ フンク・カロリン、島おこしと観光―「観光地」と「生活空間」の両立は可能か―、琉球大学 IIOS 公開フォーラム：地域の「宝」を活かした観光とまちづくり・島おこし、2012年2月20日、琉球大学（那覇市）
- ④ 本多博之、戦国豊臣期の政治経済構造と東アジア、広島史学研究会大会シンポジウム、2011年10月29日、広島大学（東広島市）
- ⑤ 久保田啓一、広島藩の文芸と藩儒寺田臨川、九州大学国語国文学会、2011年6月5日、九州大学（福岡市）

〔図書〕（計10件）

- ① 三浦正幸、吉川弘文館、神社の本殿、2012、239
- ② 三浦正幸、南々社、平清盛と宮島、2011、175
- ③ 岸田裕之、吉川弘文館、大名領国の政治と意識、2011、450
- ④ 岸田裕之・西別府元日・勝部真人・中山富廣・藤川誠・脇坂光彦、吉川弘文館刊、広島県の歴史散歩、2009、336
- ⑤ 野島永、雄山閣出版、初期国家形成過程の鉄器文化、2008、298

〔その他〕

研究成果を地域社会に還元するために、広島大学博物館と共同で展示会や公開講演会や年3回程度の季例会を開催するとともに、学術誌『巖島研究』5号～9号を刊行した。

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

狩野 充徳 (KANO MITSUNORI)  
広島大学・大学院文学研究科・名誉教授  
研究者番号：30132426

### (2) 研究分担者

岸田 裕之 (KISHIDA HIROSI)  
龍谷大学・文学部・教授  
研究者番号：10093585

勝部 真人 (KATSUBE MAKOTO)  
広島大学・大学院文学研究科・教授  
研究者番号：10136012

妹尾 好信 (SENOO YOSHINOBU)

広島大学・大学院文学研究科・教授  
研究者番号：10171357

高永 茂 (TAKANAGA SHIGERU)  
広島大学・大学院文学研究科・教授  
研究者番号：10216674

伊藤 奈保子 (ITO NAOKO)  
広島大学・大学院文学研究科・准教授  
研究者番号：20452625

本多 博之 (HONDA HIROYUKI)  
広島大学・大学院文学研究科・教授  
研究者番号：30268669

西別府 元日 (NISHIBEPPU MOTOKA)  
広島大学・大学院文学研究科・教授  
研究者番号：50136769

中山 富廣 (NAKAYAMA TOMIHIRO)  
広島大学・大学院文学研究科・教授  
研究者番号：50198280

有元 伸子 (ARIMOTO NOBUKO)  
広島大学・大学院文学研究科・教授  
研究者番号：50202768

竹広 文明 (TAKEHIRO FUMIAKI)  
広島大学・大学院文学研究科・准教授  
研究者番号：60252904

古瀬 清秀 (FURUSE KIYOHIDE)  
広島大学・大学院文学研究科・教授  
研究者番号：70136018

フンク カロリン (FUNKU KARORIN)  
広島大学・大学院文学研究科・准教授  
研究者番号：70271400

三浦 正幸 (MIURA MASAYUKI)  
広島大学・大学院文学研究科・教授  
研究者番号：80136134

久保田 啓一 (KUBOTA KEIICHI)  
広島大学・大学院文学研究科・教授  
研究者番号：80186452

野島 永 (NOJIMA HISASHI)  
広島大学・大学院文学研究科・准教授  
研究者番号：80379908

瀬崎 圭二 (SEZAKI KEIJI)  
広島大学・大学院文学研究科・准教授  
研究者番号：70413284

(平成21年度～)

### (3) 連携研究者

( )

研究者番号：